# 原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百五号

## 原告団レポート

遺族――三田ナツエさん

# 燃え続ける三池の火

## 義母の命ささえながら

### 片田舎の農家に生きる一遺族の手で

夏じゆう労苦をいとわず育ててきた稲穂のなかに立つ三田ナツエさん。ご苦労さんでした。

「表の通りを往き来する人の姿が見られるから、ここがよいといいますので」と、ナツエさん。

聞けばハルヨさんは数年前に動脈硬化で倒れて以来半身不髄の不自由な身だという。「死ねばよいのに、この人に迷惑かけるばかりでつらかですたい」といったかと思うと、もう老婆はさめざめと泣くのだった。

事実、かなりの間ナツエさんはこの姑の看病で、毎日眠れぬ夜がつづいた。腰が曲ったのも、看病しているうちのことだというから、大変な労苦だったに違いない。

### 馴れぬ手で

夫の道二さんこそ三川鉱に坑内機械工として働いていたものの、家ではしゅうとの勇三郎さんがまだ元気に百姓をやっていた。

結婚は二十一年の十月二十三日だったが、結婚前ナツエさんは郵便局に働いていたのだったから、彼女は農具類の名前ひとつ知らずに農家の嫁としてとついできたわけである。「さとの母が、体がもてんときはいつでも帰ってこい、といってくれたほどでした」と述懐するが、道二さんの人柄にひかれるまま荒っぽい仕事が待つ百姓家へ飛びこんできたのであった。

その家は、かなり広く稲作と畠作を行なっていた。役牛さえいたのだから、その規模も察しがつくはずである。

馴れぬ手でクワを使い、牛を飼った。できた野菜をリヤカーに積んで、しゅうとと二人で市場にも通った。余りのつらさに、ときにはこらえきれなくなり、泣くために便所にかけこむこともあった。が、夫の道二さんが死ぬと同時に、労苦はいっそう重たい荷物となって彼女の肩にのしかかってきたのである。

### 子どもらと

そのとき、ナツエさんの手には四人の子どもが残された。

中学二年生だった長女の由紀子さんをかしらに、小学四年の次女久子さん、同じく小学一年の長男宏さん。末っ子の強さんにいたっては、まだ三歳の幼児に過ぎなかった。

「この子どもたちにだけは、あたりまえな道を歩かせなければ……」と、あれほど仕事にがんばっていた頼む夫はもういない。自分独りで育てていくほかはなかった。

息子を亡くしてから、しゅうとはめっきり体の衰えがめだってきた。いよいよ迫われるもののようにナツエさんは、身を粉にして百姓仕事へ。

稲作、野菜づくり、牛飼いなどなど。しゅうとがつくった大根、白菜、ネギ、からいも、じゃがいも、ナス、胡瓜などの野菜類を、リヤカーに山と積みながら、ナツエさんは市場へ一日に二度も通ったことさえある。ほとんど朝は四時頃には起き出し、懐中電灯で足もとを照らしながらリヤカーをひっぱったものだった。子どもがその後ろから押してくれたこともあったが、彼女には夜が更けて、風呂に入るまで地下足袋のままという毎日が続いた。泣く余裕さえなかったという。

### 今暖い手が

しゅうとの死。姑の病気。たとえ子どもは一人、二人と独り立ちしていったものの、もう百姓仕事はあきらめるほかはなかった。いま彼女独りで耕作しているのは、一反七畝の稲作に、屋敷うちのわずかな畠ばかり。

「ばあちゃんの病気からこっちは、近所の人から『あんたんところは、いまは野菜から貰わんなんね』と、慰められるでつなってしまいました」

家の転落ぶりを、ナツエさんはこう語っては「ホ、ホ、ホ」と笑ったが……。

さいわいなことに、由紀子さんと久子さんの二人の娘はすでに他家へとつぎ、長男宏さんは近くの三井アルミニュムに家から通勤している。末っ子の強君は三池工業高校で勉強中だが、あと二、三カ月すれば卒業だ。

とついでいった娘さんたちからは、いまでは暖い手が差し伸べられてくるようになった。洗濯機、掃除機、冷蔵庫、扇風機などほとんど贈られたものばかり。とくに扇風機は、「畑から帰ってからお母さんが熱かろけん、風にあたってくれんね」ということで、贈ってもらったのだそうな。

今はこの世にいないしゅうと勇三郎さんの厚意も、身にしみている。勇三郎さんは息子の道二さんが死ぬと、何はさておきナツエさんにいったのは、「これからは、私が精いっぱい加勢するけん、どうかこの家で暮らしてくれ」、ということだった。そして田畑でも一番よいところをナツエさんに。

### 豊かな人柄

それでも亡夫道二さんを思い出すことがしきりで、そんなときにはすぐ仏壇の前に座りに飛んでいく。「気持からでしょうけど、話しかけているうちに主人の声が聞こえてくるとです」、とナツエさん。いまでは御不動さんを信仰しているという彼女の心のなかに、きっと亡夫道二さんが生きているのであろう。

思えば道二さんは、坑内機械工としても、あのはげしかった会社の差別支配のなかでさえ、先山としての采配をふるほどの人間だった。

昭和三十三年の二月以降彼の手で一日も欠かさず書き続けられてきた〝出役簿〟が、ナツエさんの手もとに保管されている。

その初めのページの一番上の一行に――「一日。土曜。諸材料運搬、及不良品の坑外揚げ。日高、城門、木村」とある。

三十五年一月二十二日以降、同年の十一月一日までは空欄続き。ただ「無期限スト。ロックアウトに対抗」の文字が書きなぐられているだけだ。いうまでもなく、その間が「総資本対総労働の闘い」と呼ばれたあの三池大闘争を意味しているだけに、その空欄は読む者の心にズシリと重く響く。

同年十一月二日の欄から「出」と再びはじまる記入が、彼の命をのみこんだ三十八年十一月九日のあの日の朝の「九日。土曜」、という文字をもって終る。

道二さんは生れつき豊かな人間性をもっていたらしく、生前油絵に才能を発揮していた。美樹会の会員で、中央の展覧会に出展する腕まえさえもち、福岡県の美術展では幾回かの入選をさえ果たしている。

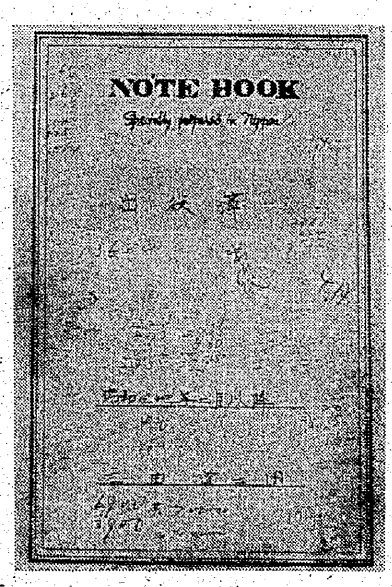
組合運動では、「先頭に立つ人ではなかった」（ナツエさん談）ものの、「俺が三池労組から身をひくときは、もう組合がなくなるときだ」とがんばっていた。

### 三池の火が

いうまでもなく、ナツエさんは三池大災害裁判闘争を進める原告団の一人である。

いま、その耕作面積こそ減らしてしまったものの、日ごとに細っていく老いた姑の命をささえる一方で、なお一反七畝もの稲作を続け、そのうえ裁判闘争の怒とうのなかに身をおいて歩いているナツエさん。ときには裁判勝利への確信がゆらぐこともあるというが、そんなとききまってはげましてくれるのがすぐ近くに住んでいる新労組員のCO患者だとのこと。彼らはいうとか――「そんか弱音をばいてどうするかん。勝ってもらわんなら。また三池労組がついていることだし、勝つにきまっているが」。

一見時代から遠くとり残されたような片田舎の一軒の農家にも、一人の遺族の手にかぎされながら三池の火は燃え続けていた。




道二さんが離さなかつた出役簿

## 小さい体の人

大牟田市といえば町のただずまいを思わせるが、でも萩尾町二丁目十八番地といえばそこかしこに森も茂る農業地帯だった。

たずねていった遺族の三田ナツエさんの家は、まぎれもなくひと目で農家とわかった。

屋敷うちの、ちょっと荒れ気味の畑には、ねぎ、ナスなどの野菜が秋の陽射しを浴びていた。でも手入れされたらしい様子もなく、なにがなしらぶれた感じを否めなかった。

玄関に立って来意を告げると、薄暗い奥の方から女の声で「ハーイ」という返事が返ってきた。

小さな体の人が姿を現わした。まだそんなとしでもないはずなのに、腰が曲っているのが奇異に思われた。顔は、その様子とはまるで逆に、五十三歳と聞いてきた人とは思われず意外に若く見えた。それに人柄のせいからでもあろうか、終始にこにこした感じのその表情がいっそう若く見せた。

それは曲った腰の様子とはどう見ても不つり合いだったが、その人こそほかでもなく遺族の一人――三田ナツエさんだったのである。

### 姑と二人で

夫の道二さんを、昭和三十八年十一月九日のあの三川鉱大爆発でうしなってから早くも十四年。

あのとき四十歳だった（大正十二年六月五日生れ）ナツエさんはすでに五十四歳。老境にはいった人の証拠に、腰がもう曲り始めている。

あの日命を奪われた道二さんは行年四十二歳（大正十年五月十日誕生）だったから、男としてはほんとにこれからだったのだが。

すすめられるまま家にあがると玄関先の居間に、白髪の老婆が寝床のうえにつくねんと座っていた。ハルヨさんといって、亡夫道二さんの実母だとのこと。八十六歳だとか。四十八年の七月二十日つれ合いの勇三郎さんが没した（行年七十四歳だったよし）あとひとしおさびしくなった身を嫁のナツエさんから暖くささえられながら、こうして毎日寝床のうえで余生を送っているのだった。